
魔王、そして勇者達

T・K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王、そして勇者達

【Nコード】

N1897D

【作者名】

T・K

【あらすじ】

世界を平和に導いた勇者達。それぞれ平和な時間を愛し、そして満足な生を送ろうとしていた。だがそこに、一つの声が響き渡る……！どマイナーとどメジャーの共演です。無茶極まりないですが、なにとぞお見逃しを……

魔王の呼び声

来れ

人間に幻想を抱きし者達

英雄となりし者

血の絆を得し者

伝説となりし者

天の血を引く者

王と天を継ぐ者

夢と現にある者

水の護を持つ者

竜と人を繋ぐ者

誘おう

真実を告げるために……

魔王の呼び声（後書き）

もし読んでくださった方がいましたらありがとうございます。勢いで始めてしまったものですからどう転ぶかは私にも分かりませんが、何とかやっていききたいと思っています。

たことが無い。しかし何よりも彼を驚かせたのは、世界の様子が自分分が知っているものとあまりにも違いすぎたことだ。

(全て：全てに色が無い：)

そう。空も、森も、水も、何一つとして色を持ったものが無かった。全てが、白に染まっていたのである。

彼は慌てて立ち上がり、そんな馬鹿なとバルコニーの手すりを掴んで周囲を見渡してみた。しかし、そこにあったのも先ほどと同じ、白に染まったものがあるだけ。

しかも更に悪いことに彼は気が付いた。周囲を見渡す過程でこの城の城下町らしきものも見つけたのだが、そこから人の気配がまったく感じられなかったのである。

(：いや、違う。人の気配が感じられないのは町だけじゃない：この城からもだ：)

そう、これだけの城なら何人かは人がいるはず、と言うよりいなければおかしいのだ。しかし、それでも何も感じられない。その上人の気配の代わりに彼はひしひしと感じるものがあった。彼がしてきた旅に付き物だった気配、人外の魔物の気配である。しかも、それは城の中から漂ってきていた。

思わず、彼は額を押さえる。

(何なんだここは：一体、俺はどうしてしまったんだ：?)

あまりの出来事に頭が混乱してくる。だが何とかして落ち着こうと、自分に起こったことで心当たりは無いか、記憶を探ってみることにした。

(俺は：姫を連れ出すことを王に許してもらって：)

竜王と言う人々を苦しめた魔王を倒し、そして慕っていると言ってくれたローラ姫を連れて、彼は新天地を探す旅に出たのだ。だがその途中、

(そうだ。旅の途中に泊まった宿屋で変な声が：)

だんだん彼は思い出し、ついにそのことを突き止めたのだった。甘えてくるローラ姫を抱きしめていた時、その声は響いてきて、そ

して話すなかで「誘おう」といつていたのである。ならばここは、その声が言っていた場所なのだろうか？

（しかし、何故俺を誘うんだ…？）

彼はその声の意図が分からず、腕を組む。それにあの声が響いてきたとき、どうやらローラ姫には声が聞こえなかったようだが、自分だけならまだしももしローラ姫までこちらに来ていたらと思うと焦りが心を焦がしてくる。

しかし彼が思い悩むことすら、この白い世界は許してくれなかった。

突然彼の産毛が逆立ち、彼はバルコニーの扉を振り返った。どうやら、魔物たちに自分のことがばれてしまったらしい。何体もの魔物が近づいてくることを彼の感覚は伝えていた。このままここには、集まった魔物たちの餌食になってしまうだろう。

思わず、彼は舌打ちをする。

「くそ…まだ詳しく状況も分かっていないのに、動けと言うのか…」
だが何を彼が言おうと状況は変わらない。やむを得ず剣を抜き、盾を構えてテラスから城の中へと入っていった。

白い世界（後書き）

ドラクエ1の主人公の登場です。一応名前に関しては公式かそれっぽいものを知っていればそれに準じるつもりですが、知らなかったりなかったりした場合オリジナルの名前を付けるのでご了承ください。

乱戦、そして脱出

彼の予想通り、城の中には魔物が集まりだしていた。とはいえ、それらの魔物の姿もこの城と同じく、彼は見たことが無い。外見上は人に見えるのだが、漂ってくる気配はどう見ても魔物というものもあったし、中にはさまよう鎧のように全身が金属でできているものもいた。

彼は戸惑うが、魔物たちは彼の迷いなど気にせず襲い掛かってきた。

「くそ、やるしかないのか！」

向かってくる魔物の何体かを剣を振って切り伏せ、周囲に目をやる。どうやらここは城の上階と下を繋ぐ連絡路のようなものらしく、下に向けられた階段が目に入ってきた。

（ここにもジリジリと消耗していくだけだろう。狭いところの方が多数を相手にする際は優位に立てるかもしれないが、それでも脱出して逃げた方がいい。それに…）

ローラ姫も、いるかもしれない。そう彼は考える。

気配を探ってみても近くにいない様子は無いが、もしかしたら自分と同じくこの色の無い世界にいるのかもしれないのだ。

方針を決め、向かってくる魔物たちを切り払い、気合の叫びを上げながら階段へ突っ込んでいく。

「うおおおー！ー！！」

竜王を倒した勇者の突進に有象無象の群れが耐え切れるはずがなく、彼は階段へとたどり着いた。そしてそのまま下の階へ下りていく。

魔物たちも彼を見逃すつもりは無いらしく、すぐさま体制を整えて追いかけてきた。しかし、

「考えが足りなかったな！」

そう階段をおりきった所で叫び、彼は振り返ったのである。目の

前には狭い通路につつかえるようになっていた魔物の群れがあった。そして今一度、彼は叫ぶ。

「ベギラマ！」

すると、突然炎が湧き上がり魔物たちを包んだのであった。絶叫を上げて焼け落ちていく彼らを尻目に城の庭に出て行く。だが、

「…く…ここにもか…」

彼は顔をゆがめる。

目の前にはまだ多くの魔物たちが群がっていた。また突破しようかと考えるが、これほどの数となると少々きつい。しかも出口らしき扉には相当の距離がある。

（仕方ない。ここは、回復を行いながら進んでいくしかないか）

彼は腹を決める…そのときであった。

「ライデイン！！」

少年の声が、城の中庭に響き渡った。

「こ、これは…！」

眼前に広がる、魔物たちの群れに雷の剣が突き立っていく様に彼は絶句する。

（ライデイン…俺の祖先であるロトが使ったとされる、雷撃系の攻撃呪文…これを使える者がいるとは！）

だが一体誰がと思い、声のした方である向こうの扉を向いてみる。そこにいたのは、彼とそう変わらない少年だった。

（人がいたなんて…）

少年は驚きを隠せない。一切の人の気配が感じられず、魔物の気配が充満する中で見つけれられるとは思ってもいなかった。

少年は青い服とマントに身を包み、剣と盾をそれぞれの手に下げている。顔にある丸い目は人の良さを示し、黒髪を生やした頭には額の部分に透明な水晶をつけた額当てをつけていた。

大魔王ゾーマを倒し、アレフガルドの平穏を保つ旅にでた少年は変な声を耳にしたのであった。だがそこで意識が暗転してしまい、

気が付いて見れば牢獄に転がっていたのであった。

何故こんな場所に、そして色が無く、人の気配のしないこの世界は何だと思い、とりあえず城を出てみようと思った矢先、魔物たちと何かが争っていたためにそれを見てみれば、眼前の青年が戦っていたのであった。

少年はまじまじと青年を見る。しかしそこで、青年を始めてみたとき以上の驚愕が彼を包み、目を見張ったのだった。

（！ あれは、ルビスのマーク！ それに身に付けているのは、僕が身に付けていた：！！）

そう、青年は少年が封印したはずの武具を身に付けていたのである。しかも、その武具の中にはあの王者の剣まで含まれていた。

（だが何故あの青年が…って、危ない！）

少年の姿を見るために、青年は注意をそらしてしまっていたのだろう。それを魔物の一体が好機と見て攻撃してくる。しかも頭を狙ってきた。

「！ ち…」

青年は舌打ちをした。このタイミングでは間に合わないと悟ったらしい。衝撃に備えるべく、目を閉じて体に力をためた。

（させるか！）

しかし、そこで少年が手に下げていた剣を槍投げの要領で投擲する。それは見事に襲い掛かろうとしていた魔物の腹に刺さり、絶命させた。

「大丈夫ですか！」

と声をかけながら、青年の方に向かう少年の姿。それに気付き、青年は瞳をあけた。

「すまない、助かった！」

彼も声を返し、今度は少年に近づこうとする魔物を再びベギラマで焼き払ってくれた。

青年に近づく否や、少年はすぐに剣を回収して構えを取り、横目で青年の構えを見る。改めてみると隙がなく、堂に入っていた。ど

うやらかなりの使い手らしいと彼は考える。

（どうやら正体を詮索している暇は無いらしい：まず、この場を切り抜けないと：）

そしてお互いに背中を守るようにし、周囲を窺った。

しばらくの間、膠着状態とも言えるにらみ合いが続いた。そのとき、少年が小声で青年に話しかけた。

「：すみません、少しお聞きしたいのですが」

「：何だ？」

「あなたはここの住人なんですか？」

「！　そういうように話すと言うことは、まさか君もここに突然：！？」

「え、あなたもなんですか！？」

驚きに二人は大きな声を上げてしまう。だが、それが引き金になった。

膠着がとけ、再び魔物たちが襲い掛かってくる。それを切り伏せながら、なおも二人は話を続ける。

「そうですか、あなたもここに突然着たんですか！　ならお互い異邦人同士ということですね！」

「ああ、そうみたいだな！」

「ならここを切り抜けるために、一つ手を組むと言うのはどうですか！」

「手を組む：！？」

「ええ、お互いここがどこか知らない上、僕はこんなところで命を落としたくない！　あなたも戦っていると言うことは、僕と大体同じでしょう？」

戦いの中だというのに、少年は茶目っ気たっぷりに片目をつぶった。まだ会って間もないが、この場を切り抜けるにはこれが一番の手であることは知っているはずだと少年は思う。

しばらくの間、青年は考えていたようだが、やがて顔を上げ、
「：わかった、君の言葉に従うとしよう！」

という了承の返事を返してきた。

「それは良かった！　ならここは一つ…」

「ああ。…いくぞ！」

お互いに頷きあい、扉を目指して二人で駆ける。

達人同士が手を組んだことにより、魔物の数の利も吹き飛んでしまった。見る見る数を減じていき、彼ら二人の強さにおびえて手を出さないようになってくる。

そうなってしまえばもうこちらのものである。そのまま扉に向かっていき、そして城門を抜け、城下町と一気に抜けていったのであった。

乱戦、そして脱出（後書き）

勝手ながら第三話の部分をこちらに持ってこさせていただきました。始めに投稿したさいはあれでいいかなと思っていたのですが、後になって考えてみるとやっぱり少し短すぎるとも思えてきました。話を削ってしまい、すみません。

その正体

「こ、ここまで来れば…」

「ああ、多分追って来ないだろう…」

二人して荒い息をつきながら地面に崩れ落ちた。周囲には木々が生い茂っており、二人は城、そして城下町を抜けたことを示している。

と、そこで少年が青年を向く。

「…どうでしょう。一応助け合った仲、そして同じ迷い人同士ということで、自己紹介など」

「…自己紹介、か」

「ええ、さっきも言いましたが、僕はこんなところで死ぬ気なんて毛頭ありません。それならお互いに困っているもの同士、さっきだけでなくこれから手を組んでいた方がいいと思いますから」

青年は腕を組み、顔を俯かせる。そしてしばらくしてから「いいぞ」と言って顔を上げた。

「君の言うことももつともだ。俺も死ぬわけにはいかないし、手を組んだ方が良くに決まっているな」

「ええ、その通りです。…では、言い出した僕から自己紹介をしますね。僕の名前は、アレル——」

「!!」

名前を言ったとたん、青年は固まってしまった。その顔は驚愕にそまり、目は大きく見開いている。

いぶかしんで、少年、アレルは問うた。

「ど、どうかしたんですか？　僕の名前が何か…」

「…あ、あなたはまさか…」

しかしアレルの言葉を聞いていない様子で青年は続け、逆に問い返してくる。

「ロ…ロト…なんですか…？」

「？ ええ、よく知っていますね。それは僕のもう一つの名前なんですよ」

まだそれ程知られていないとアレルは考えていたが、知っている人がいるとは驚きだった。そういえば、何故封印した武具を装備しているのかをまだ聞いていない。

「こっちからも聞いていいですか？ 何故あなたは僕が封印した武具を装備しているんです？」

「…ええ、それは当然ですよ」

「え？」

「なぜなら、俺は…」

そして青年は、言う。

「…ロト、あなたの子孫だからですよ…」

「…驚きました。まさか、未来の人間に会えるなんて…」

「こっちもです。あなたが先祖のロトだなんて、思いもしなかった…」

二人は驚愕の余韻を残したまま、話しを続ける。青年は相手が祖先であるロトだと分かると、気にしなくて良いと言うアレルの言葉を無視して敬語を使うようにしているのだった。

ちなみに二人は今、魔物の群れから逃げた疲労から回復したため、森を抜けるため歩いていた。一箇所にとどまるのはこの濃厚な魔の気配に察知されるとまずいことになるためである。

「…ヨシユア、でしたっけ。その装備を身に付けているということ
は、未来の世界は…」

「ええ、魔王が再び現れました。しかし、俺がもう倒しています」

「そう、ですか…」

「…？ 何か思うところでも」

そうヨシユアが言うと、アレルは手を顎に当て、考えながら言うのだった。

「いえ…僕が倒したゾーマが言っていたんです。自分を倒しても、

新しい魔王がいずれ現れるだろう、と。そのことを思い出して、そしてこの状況から考えて、僕はその新しい魔王が僕ら二人を集めたんじゃないかと、あなたの話を聞いたとき思っただけです」

「…」

「確証も無いし、自画自賛みたいな考えですが、僕ら二人は魔王を倒せるだけの實力を持っている。それにそんな人間なら子孫にしても厄介でしょう。ならその人間を倒してしまえば…」

「残った人間とも楽に戦える、と？」

アレルは頷いた。そして周囲の風景をみる。そこには白一色に染まった景色があった。

「でも少し考えてみたら、ありえ無い考えだと思い直しました。第一ここには人の氣配がほとんどしない。ならもう人を滅ぼすと言う目的は果たされていることになる。なら僕達を呼んでも障害になるだけで利益はあまり無いでしょう」

「…なるほど…」

「でも、それなら何故僕達をこの世界に呼んだんでしょう…」
考え込むアレル。ヨシユアも同じく、腕を組んで考え込んだ。

「…ん!？」

しばらくの間そうしていると、突然ヨシユアが驚きの声を上げた。アレルが何事かとたずねる。するとヨシユアは人差し指を口に当てた。

「静かに…この先に、人の氣配がするんです」

「!？」 本当ですか？」

「ええ、一人旅が長かったせいとか、氣配に敏感な質になってしまひまして。それを信用すれば、間違いなく人がいます」

「なら早く…」

「でも、少し変なんです」

そこまで言ったとき、ヨシユアが自信なさげな声を出した。疑問に思い、アレルが聞く。

「…何が変わるんですか？」

「いえ、人から漂ってくる気配が、何と言うか…強すぎるんです」
「え？」

「気配から判断して相手の強さも何となくは読めるんですが、先にいる人間は…俺たちと、同じくらいの強さを持っているんです」

「…」

あまりの事実のアレルは絶句した。これも自画自賛かもしれないが、勇者と肩を並べられる人間がそこまで多くいるとは思えもしないなかった。

と、そこでヨシユアが更に深刻な顔になる。

「…！ どうやらこっちに気付いたようです。まっすぐ向かってきています」

「…」

「どうします？ 戦いますか？ それとも逃げますか」

アレルは少し考え、

「いえ、ここにいきましょう。せっかく人と会えるチャンスですし、この機会を逃すわけには行きません。ですから…」

「ここにいる、ということですか。…そうですね、せっかくのチャンスですし」

二人はそろって頷く。そしてこちらめがけて駆けてくる者を待ち、現れるのを待つのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1897d/>

魔王、そして勇者達

2010年10月10日23時00分発行